

普及情報

丹波大納言小豆の産地振興を目指して

はじめに

丹波地域における丹波大納言小豆の生産の歴史は古く、旧氷上郡春日町での栽培は四百年以上前に遡る。大粒で色調、風味に優れ、煮くずれしにくいため、主に高級和菓子に利用されている。

JA丹波ひかみ（以下JA）によると2008年丹波市内の作付面積は、32ha増加の245haで、産地の目標である300haに向け、ここ数年順調に増加している。

関係機関の連携による振興

この背景には、近年の作柄安定、そして生産者に魅力のある高単価（2007年平均単価1,250円/kg、平均収量125kg/10a）とともに、JAと丹波市による「種子費用助成制度」も生産意欲を大きく後押しした。関係機関の連携した生産振興で、新たな生産者の獲得と既存生産者の面積拡大が図られた。普及センターではJAと連携し、栽培講習会、病害虫発生状況調査による防除情報の提供など、栽培意欲の喚起と栽培管理技術の向上を図っている。しかし、生産者の高齢化が進む中、特産物として産地強化を図るには、集落営農組織も含めた新たな担い手による生産体制と生産技術の見直しが必要である。そこで、2006年から集落営農組織等の大規模栽培を想定した普通型コンバイン収穫による省力化を目指す技術実証に取り組んでいる。3年目の本年は市内6か所1.2haに狭条密植栽培の実証ほを設置、試験研究機関の協力を得ながら機械収穫に合わせた栽培管理技術の確立を進めている。一方狭条密植栽培を導入したいという集落営農組織等担い手の要望が強く、2008年の導入面積は約11haで実証ほと同様に技術指導を行って

いる。

なお、生産の基礎となる種子の安定供給については、2005年からJAと連携し「兵庫大納言」を原種として導入し、種子生産組織の育成を進め、2007年から1組織で種子生産に取り組み始めた。しかし、種子生産者の栽培管理や収量品質には差が大きく、栽培管理技術の平準化を図る必要があった。栽培管理の現状を農家ごとに詳しく調査、収量品質を比較検討し指導を行い種子生産者のレベルアップを進めている。2008年は新たな組織を加え、2組織、8.5haで種子生産に取り組み、2009年の安定的種子供給に見通しがついている。

今後の取組

生産量と品質の安定的向上を目指すため、小規模、大規模、集落営農組織など生産者のタイプと規模に応じた栽培管理技術指導により、更なるレベルアップを図る。さらに、収穫後の乾燥調製をJAで一括して行うシステム作りを進め、品質の均一化や生産者の作業軽減に取り組んでいきたい。

三木 直樹（柏原農業改良普及センター）

（問い合わせ先 電話：0795-73-3802）



図 狭条密植栽培実証ほの取組